

GLOBAL VOYAGE

[グローバル ヴォヤージュ]

PEACE BOAT

2019

Winter

待望のオセアニア一周
ミドルクルーズ

第二特集

色鮮やかな紅葉の世界

魅惑のメープル街道へ

[ケベックシティ・モントリオール]

[発行](株)ジャングレイス

地球の鼓動を全身に感じる オセアニアの船旅へ

第103回クルーズは、冬の日本を抜け出して、夏の南半球へ。多彩な魅力であふれるオーストラリア全5寄港地を巡った後は、ニュージーランド屈指の景勝地「ミルフォードサウンド」を遊覧。エレガントな街並みとたくましく豊かな大自然、そこに息づく歴史ある文化との出会いが魅力の、待望のオセアニア一周クルーズへ。



CONTENTS

特集

地球の鼓動を全身に感じる

オセアニアの船旅へ

- オセアニアの自然を満喫…………… P4
- オセアニアの美しい街…………… P8
- 先住民族との交流…………… P10
- 固有種の楽園…………… P11
- 水先案内人特別寄稿
海堂 尊さん…………… P12

第二特集

色鮮やかな紅葉の世界

魅惑のメープル街道へ

- ケベックシティ…………… P14
- モントリオール…………… P16
- PEACE BOAT NEWS…………… P18



Ocean Dream

オーストラリア・シドニー港停泊中のオーシャンドリーム号

表紙の写真

朝と夜で表情を変えるシドニーの街並み。第103回クルーズで寄港予定だ。



AYERS ROCK/ULULU

赤い大地に忽然と姿を現す、高さ約350m、1周約10kmを誇る巨大な一枚岩。近年ではアボリジニ文化を尊重し、彼らの呼び方「ウルル」という正式名称に。

〈ピナクルズ〉ナンバン国立公園の一角にある。一帯は砂漠だが、公園があるのはインド洋の海辺。岩はどれも形やサイズがさまざまでおもしろい。〈グレートオーシャンロード〉「十二人の使徒」の由来は、かつて12の岩が突出していたことから。今は南極海からの波や風によってそのいくつかが浸食された。



PINNACLES

広大なオーストラリア大陸で感じる地球の息吹

オセアニアの中でも86%の陸地面積を占め、広大な土地がどこまでも続くオーストラリア。「地球のへそ」と呼ばれるエアーズロックをはじめ、神秘さが魅力のピナクルズ、壮大な海岸道路グレートオーシャンロードなど、思わず息を呑むような絶景が点在している。

オーストラリアの人々ですら、「生に度は見えておきたい」という世界遺産「エアーズロック」。現地では、1万年以上前から定住していた先住民アボリジニの言葉で「ウルル（偉大な石）」と呼ばれている。麓には洞窟があり、内部には彼らによって描かれた壁画が残るなど、アボリジニにとって神聖な場所として崇められていた。表面の赤土は陽の当たり方によって、オレンジや真紅、紫など表情を刻々と変え、地球が生み出したこれらの芸術は一日中見ていても飽きることはない。

オーストラリア西部にあるもうひとつの世界遺産が「ピナクルズ」。黄色の砂の丘に何百年という歳月をかけてできた岩の塔が幻想的な場所だ。かつてこの地は海底だったとされ、貝殻でできた何千もの塔は、その様子から「荒野の墓碑」とも称される。まるで別世界へ足を踏み入れたような不思議な光景に圧倒されるはずだ。

そしてメルボルンの南西全長約250kmに及ぶのが、「世界一美しい海岸道路」として知られる「グレートオーシャンロード」。複雑に入り組んだ断崖絶壁や奇岩群が延々と続く道のりはまさに絶景。海中からいくつもの奇岩がそびえる「十二人の使徒」は最大の見どころだ。

地球にこんなところがあったのかと思わず言葉を失う感動の連続が、我々を待ち受けている。



Oceania
Australia & New Zealand



GREAT OCEAN ROAD



オセアニアの大自然を語るには、断崖絶壁の山々の間を船でゆく「ミルフォードサウンド」も外せない。ここは世界自然遺産に登録された世界有数のフィヨルド群を含む国立公園のひとつ。雪をかぶった峰を遠くまで望み、穏やかな水面の上をおよそ半日かけてゆつくりと船は進んでいく。長い年月をかけて氷河に削られた山々は、高さ1000mを誇り、目の前に迫る岩肌の迫力は圧巻のひとつだ。ところどころで小さな滝が見え、常に表情を変える絶景の連続は、船旅を選んだ者だけが味わえる至福の時間だ。

このあたりは雨が多い地域としても知られるが、急に雨が降ったり晴れ渡ったりと、その様相も神秘的。今クルーズでは、「ダウントフル・サウンド」や「ダスキー・サウンド」を含む、5つのフィヨルドを遊覧予定だ。

一方で固有種の楽園といわれるオセアニアを肌を感じるには、オーストラリア最大の島であるタスマニア島。州全体の20%が原生地域のまま残っており、島にある17個ほどの国立公園の多くが世界遺産にも登録されている。「マウントフィールド国立公園」では、階段状になった崖の上から、いくつもの水筋が流れ出ている「ラッセルフォールズ」が有名。今もここで多くの野生動物が暮らし、島固有の希少動物と出会う確率も高く、世界的にも人気の観光スポットだ。



付近の年間の降水量は6,000mm超。大量の雨が豊かな森を育み、岩肌を伝う大小さまざまな滝をいくつも見ることができる。デッキに出て景色を楽しむのがおすすめだ。



TASMANIA

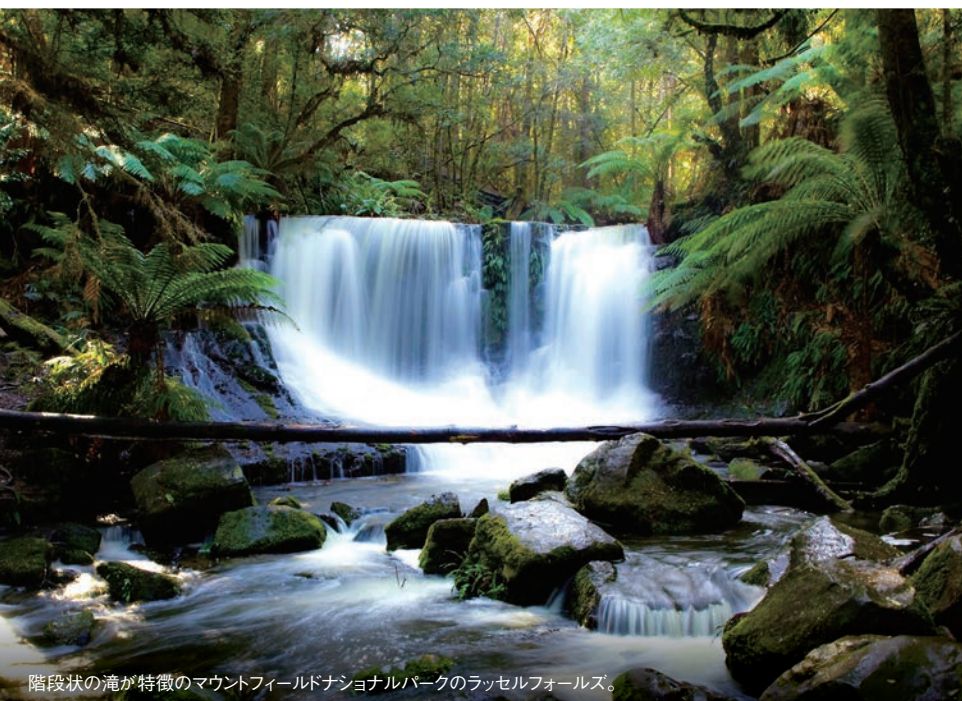
タスマニア島は氷河期にできた独特の地形と自然が魅力の島。大きさは北海道の8割程度で、赤道からの緯度もほぼ同じ。「ラッセルフォールズ」は、タスマニア島で最初の自然保護区に指定された。



タスマニア州が誇る山岳の原生地、クレドルマウンテン国立公園。



ワイングラスのようにきれいな曲線を描くワイングラスベイ。



階段状の滝が特徴のマウントフィールドナショナルパークのラッセルフォールズ。

悠久の歳月が生み出した 息を呑む美しい光景との出会い

地球が長い歳月をかけて生み出してきた絶景の数々。オーストラリアでは、固有種の楽園と呼ばれるタスマニア島へ。ニュージーランドでは、オセアニアクルーズのハイライトといえるミルフォードサウンドへ。どちらも雄大で深い緑が輝かく、幻想的な光景が続く。



MILFORD SOUND

タスマン海に面した海岸線に連なる大小14のフィヨルドのうちのひとつ。これら一帯を指す「テ・ワヒボウナム」は1990年に世界遺産に登録。

ハーバーブリッジはシンボルのひとつ。夜にはライトアップされ、日中とはまた違った表情を見せる。



オペラハウスの周辺は散策にも最適。ライトアップされた姿もきれいだ。

サンフランシスコやナポリに並んで「世界三大美港」に挙げられることもあるオーストラリアのシドニー。ランドマークとして有名な世界遺産「シドニー・オペラハウス」や「ハーバーブリッジ」といった二番の見どころを上陸前から味わえるのは、船旅を選んだ者だけの特権だ。さらに港ではヨットやフェリーなど大小さまざまな船が行き交い、港町としての活気を感じられるはずだ。また夜の出港時には、燦然と輝く美しい夜景も魅力。

この街に來たならば、ぜひ足を延ばして訪れたいスポットが「ブルーマウンテンズ国立公園」。ここは数多くの滝や渓谷を有する人気の世界自然遺産で、先住民アボリジニの伝説が伝わる奇岩「スリーシスターズ」や、雄大な景観を楽しめる「エコ・ポイント」など、一度は見ておきたい絶景が広がっている。また途中で見える木々はどれも日本では見かけないものばかり。メルボルンとはまた違った、近代都市と自然の調和を肌で感じてほしい寄港地だ。



6:100万ヘクタールに及ぶ世界遺産「ブルーマウンテンズ国立公園」。ユーカリの木々が美しい。7:現地の人々で多く賑わう「ボンダイ・ビーチ」。立派な波に乗るサーファーたちの姿も。カフェも多く楽しみ方はそれぞれ。



世界三大美港のひとつ「シドニー」



ビーフを味わうならば、ここシドニーでは新鮮なシーフードを楽しむのがおすすめ。

街中には動物園があり、コアラをはじめとした豊富な種類の動物たちとの出会いを気軽に楽しめるのもうれしい。

フェリーに乗ると近郊のビーチなどに行くことができ、海を眺めながらおしゃれなカフェでフィッシュアンドチップスを食べるのは、現地を知り尽くした人のみぞ知る通の楽しみ方だ。

この街に來たならば、ぜひ足を延ばして訪れたいスポットが「ブルーマウンテンズ国立公園」。

ここは数多くの滝や渓谷を有する人気の世界自然遺産で、先住民アボリジニの伝説が伝わる奇岩「スリーシスターズ」や、雄大な景観を楽しめる「エコ・ポイント」など、一度は見ておきたい絶景が広がっている。また途中で見える木々はどれも日本では見かけないものばかり。

メルボルンとはまた違った、近代都市と自然の調和を肌で感じてほしい寄港地だ。

Sydney



8:新鮮なシーフードはぜひ味わってほしい。ロブスターなどが有名。9:お土産の定番はやっぱりコアラ。お土産の種類も豊富だ。



多様な文化が魅力のオセアニアの街へ

移民大国として知られるオーストラリアとニュージーランド。さまざまな人種が集まって形成された国だけに、街のいたるところでそれを感じられる。ここではオーストラリアで特に人気の2都市を紹介する。



1:移動には路面電車(トラム)が便利なのでぜひ活用を。レトロな雰囲気でも、乗るだけでも楽しい。2:街中に緑が多いのもメルボルンならではの。



おしゃれなカフェが多いのは、この街ならではの。気になったお店で至福の一杯を。

世界で最も住みやすい街「メルボルン」



2010年より7年連続で「世界でもっとも住みやすい都市」1位に選ばれたオーストラリア・メルボルン。港から路面電車に乗り、1日あればメルボルン観光を存分に楽しめるコンパクトな街だ。街は碁盤の目状に道が広がっているのが特徴で、散策におすすめなのはメインストリートから続くレーンウェイと呼ばれる石畳の路地。そこを歩いているとよく目にするのが、おしゃれなカフェの数々。実は歴史的にイタリアからの移民が多く、その影響で今もカフェ文化が深く街に根付いている。他にもかわいらしいお土産屋が建ち並ぶなど、まるでヨーロッパに來たかのような不思議な感覚に陥る。

イタリア以外にもさまざまな国の文化と生活がうまく融合した点

もこの街の魅力。それぞれの国のカラーが反映された、この土地ならではの料理を味わうのも楽しみ方のひとつだ。

一方、芸術の街としても有名で、街中ではオーケストラやオペラ、美術館などを楽しむことができる。見どころは多く、1854年に建てられた「フリンダース・ストリート駅」や、メルボルン万博のために造られ、後に世界遺産となる「王立展示館とカールトン庭園」など19世紀の面影を残す建物の数々も必見だ。

この街で行われる交流コースも、他民族で成り立っているメルボルンならではの。移民を多く受け入れている団体を訪問し、さまざまな話を聞くことで、メルボルンの「今」に触れることができるので人気だ。

Melbourne



3:オーギービーフは絶品。4:雲間気の良いカフェがたくさん。5:郊外にワイナリーが点在しワインも有名。

固有種の楽園

オーストラリアのユニークな生き物たち

日本の約20倍もの本土面積を誇るオーストラリア。さらに早くから他の大陸と分断されていたため、コアラやカンガルー、タスマニアン・デビルなど、独自の進化を遂げた動物たちが多く生息する。現在、哺乳類と鳥類だけでも1000種類以上が確認されており、驚くべきはそのほとんどが固有種という点。今回は上陸中に目撃できる可能性のある生き物の一部を紹介する。



カンガルー

体長:85~160cm
[遭遇難易度★★★]

独自の進化を遂げた有袋類の代表格。郊外を移動中に運がよければ出会える動物のひとつだ。



ワラビー

体長:30~90cm
[遭遇難易度★★★]

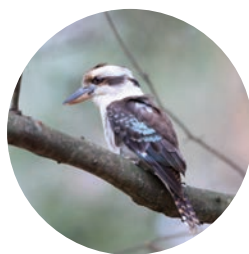
カンガルーに比べて小型で後ろ足が小さくて尾が短いのが特徴。国内に約30種類が生息。



コアラ

体長:60~80cm
[遭遇難易度★★★]

オーストラリアのシンボルともいえる存在。地域にもよるが、野生のコアラに出会えることも。



ワライカワセミ

体長:39~45cm
[遭遇難易度★★★]

鳴き声が「ワハハハハ」と人間の笑い声にそっくり。現地では有名な「楽しい森の住人」だ。



ロリキート

体長:20~30cm
[遭遇難易度★★★]

美しく配色された七色の羽根を持つ鳥。シドニー市内でもよく見かけることができる。



タスマニアデビル

体長:57~65cm
[遭遇難易度★★★]

愛らしい顔からは想像できない肉食動物。強靱なアゴで肉・骨・皮など、なんでも噛み砕く。



ウォンバット

体長:100cm
[遭遇難易度★★★]

地上で巣穴を掘って過ごす有袋類。普段はノロノロと歩くが、走ると時速40キロも出る。



フクロギツネ

体長:33~55cm
[遭遇難易度★★★]

人間を恐らないため市街地に現れることもしばしば。ただし夜行性のため遭遇は難しい。



フェアリーペンギン

体長:40~45cm
[遭遇難易度★★★]

やや前傾姿勢で歩く姿はとても愛くるしい。海岸近くの民家の下などに住むことがある。



オナガイヌワシ

体長:81~110cm
[遭遇難易度★★★]

オーストラリア最大の猛禽類。目にした人はあまりの大きさに作りものだと思うほど。



カモノハシ

体長:40~55cm
[遭遇難易度★★★]

卵を産んで母乳で育てるちょっと変わった哺乳類。恐竜がいた時代から生息していた説も。



エリマキトカゲ

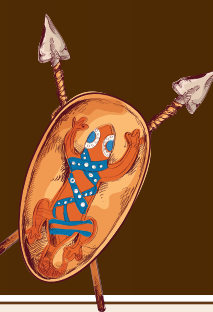
体長:60~90cm
[遭遇難易度★★★]

首のフリルがチャームポイント。相手が強いとわかると、立ち上がってガニ股で走り去る。



伝統文化を今に伝える アボリジニやマオリとの交流

ピースボートの船旅の魅力は、観光だけでなく、その地域の人々が抱える問題に向き合い、直接その声を聞ける機会があるという点。特に第103回クルーズでは、先住民族として暮らしてきたオーストラリアの「アボリジニ」、ニュージーランドの「マオリ」の人々との心あたたまる交流の場が設けられている。



Indigenous Australians New Zealand

シドニー湾クルーズと アボリジニ体験

かつてイギリスの植民地支配のもとにあったオーストラリア。時代とともに世界中から大勢の人々が移り住んできたことにより、今の「多民族国家」が築き上げられている。その歴史の中で、紀元前からこの地に暮らしていた先住民族アボリジニは、先祖から伝えられた土地を奪われ、厳しい差別を受けてきた過去があることを知っておきたい。近年になってようやく土地の権利などを認める動きが出ているが、いまだその差別は根強い。過去にシドニーに寄港した際には、彼らが抱える雇用問題の話を聞いた。



島のところでアボリジニ文化を感じる。彼らのパフォーマンスには思わず見入る。



今後も、それらの豊かな文化を体感できる交流コースを実施予定。伝統料理を食べるなどして、彼らの暮らしや歴史を肌で感じてみたいところだ。

ニュージーランドに息づく マオリ文化体験

「アオテアロア」はマオリの言葉で「白く長い雲のたなびく地」を意味し、古くから彼らがニュージーランドを指して呼んでいた言葉だ。この名前が正式な国名として認められるようになったのは近年の話。ニュージーランドの先住民族であるマオリは、1000年以上前からこの地に暮らし、自給自足の暮らしを営んできた。しかし大航海時代をきっかけにヨー

ロッパ人がやってきたことで社会は激変。19世紀にはイギリスの植民地となり、マオリの言語や文化は消滅の危機に陥った。しかし当時のマオリの中から復興運動が起こり、かつての伝統文化を今に紡いでいる。

現在、ニュージーランドでマオリのアイデンティティを持つ人々は人口の15%といわれるが、マオリの言葉や文化は、先住民族でない国民にも広く浸透している。ニュージーランドにおける交流コースでは、マオリの伝統文化を継承し続ける人々に出会い、歴史や文化を学ぶ。例えば、鼻と鼻をくっつけるというマオリ独特の挨拶など、現地にしっかりと息づいてきた文化に触れる貴重な機会になるはずだ。



boomerang

アボリジニが狩猟や穴掘りに使ったとされるブーメラン。人気のお土産のひとつだ。

レッツ・ピースボート

『チーム・バチスタ』シリーズで知られるベストセラー作家・海堂尊さんに、水先案内人として乗船したピースボートクルーズの魅力について執筆いただきました。

想像を超える楽しさと新鮮な驚き

ピースボートの名前は聞いたことがある、という人は多いでしょう。かく言う私がおその名を目にしたのはウン十年前の居酒屋の戸口で「百万円で世界一周旅行を」というポスターを見た時でした（うろ覚え）。それ以後も何度となくそんな風に目に入っていたけれど、自分には縁遠い世界だ、と思い込んでいました。でも昨年、水先案内人として乗船したところ、これが想像を超える楽しさでした。

私は取材で海外に行くことも多いのですが、ピースボートのクルーズでは海外旅行のストレスがほとんどなかったのも新鮮な驚きでした。

船内は三食昼寝つき、長旅で退屈しないようにいろいろな催し物が目白押し。外部のゲスト（私もその一人）の講演や歌や踊りやパフォーマンス。自主企画を立ち上げることもできます。毎朝の太極拳やダンスの講座もあり、船旅が終わるころには名人になれるかも。

食事の献立もよく考えられていて、三ヵ月食べ続けても飽きなさそうだし、バランスを考えられているので健康にもいいこと間違いなし。

世界各地の寄港地では上陸し、観光地訪問も組み込まれていて、上陸地に関する詳しいレクチャーまでついてくる。それはどんなガイドブックよりもわかりやすく、まさに至れり尽くせりです。



海堂 尊
Kaido Takeru
医師・作家

外科医、病理医を経て、現在は放射線医学総合研究所研究協力員を務める。2005年、『チーム・バチスタの栄光』で「このミステリーがすごい!」大賞を受賞。確かな医学知識に裏打ちされた作品で人気を集めている。著書に『ジェネラル・ルージュの凱旋』、『ケルベロスの肖像』、『ジーン・ワルツ』、『極北ラブソディ』、『ブラックベアン1988』、『ポーラースター ゲバラ覚醒』など多数。

「船室の扉を開けたらそこは外国だった」

海外旅行では移動が一番大変です。パスポートを身につけ、お金も盗まれないように注意を払う。旅先では当然の心構えとはいえ、ストレスであることは間違いありません。

ところがピースボートなら心配御無用。パスポートは船に預けたまま、上陸時は船内カードがパスポート代わり。荷物は全部、船室に置きっぱなしでいい。川端康成先生が乗船していたら「船室の扉を開けたらそこは外国だった」という書き出しで、名作を書いていたかもしれません。

しかもショート・トリップから帰ればそこは自分の馴染みの船室。こうなるともはや、海外旅行の革命です。

おまけに船旅は時差ばけがありません。たまに揺れて船酔いしても、酔い止めの薬を準備してくれているので無問題。

ハードルが高いのは費用と期間の二点だけ。でも三ヵ月間の宿代プラス三食の食費だと考えたら、決して高くない。

ならばあなたが三ヵ月の自由な時間を使えるご身分ならばものは試し、騙されたと思ってピースボートに乗船してみたいかがでしょう。そうしたら私に誘われたことをきっと感謝するでしょう。ピースボートにはヘビー・リピーターが、大勢いるのがその証拠。何より、私がおその予備軍のひとりなのですから。





ピーク時には色鮮やかな紅葉で街全体が彩られる。「メープル街道」と名付けられるのも納得の光景だ。

Quebec City Food & Goods



メープルシロップはお土産にも最適。



ポテトとチーズが入ったビエロギ。



海産物が有名なカナダ。スモークサーモンは絶品。

ダム聖堂」など見どころは満載だ。アップパー・タウンとロウワー・タウンをつなぐのは、急な勾配が特徴の「首折り階段」。坂の多いケベックの街で最古の歴史を誇る。

ロウワー・タウンでは、北米でもっとも古い繁華街である「プチ・シャンプラン通り」が有名。石畳の小さな通りには、かわいらしいお店が建ち並び、服やアクセサリなど、フランスらしさが感じられるクラシカルな空間が広がっている。街歩きに疲れたら、ヨーロッパ風のおしゃれなカフェで休憩するのもこの街の楽しみ方のひとつ。

他にも、長さ10 mほどの小道で、画家たちが絵を売っている「トルゾール通り」など見どころは尽きない。秋は紅葉が街全体を包み、まるで絵画の中に迷い込んだような至福の時間を過ごせるはずだ。

16世紀頃よりフランスの毛皮交易の拠点として発展したケベック・シティ。「ケベック」とは、先住民の言葉で「狭い水路」という意味で、その名の通り、セント・ローレンス川の川幅が狭まる地点にこの街はある。この州はフランス語が公用語とされ、北米にいながらもフランス文化を感じられる興味深い街だ。

世界遺産である「ケベック旧市街

ヨーロッパを彷彿とさせる 北米唯一の城郭都市ケベック・シティ



Quebec City | Montreal
CANADA

色鮮やかな紅葉の世界
魅惑のメープル街道へ

ピースボートでは初となる、「メープル街道」をゆく第102回クルーズ。カナダ国旗にも描かれた「カエデの木」が多く群生された街道は、北はケベック・シティから南はナイアガラまで約800kmに及ぶ。日本とはひと味違った紅葉を求め、晩秋のカナダへ。



1:「首折り階段」の頂上は人気の撮影スポット。2:バロック様式の傑作「ノートルダム大聖堂」。



3:アップパー・タウンにそびえるシャトー・フロンテナックはこの街のシンボル。4:「トルゾール通り」は素敵な絵画でたくさん。5:運がよければ要塞で兵隊の行進が見られることも。



最近の気候変動で、カナダの紅葉も影響を受け、紅葉シーズンも年によって違ってきている。

第102回クルーズ PREVIEW



かつてマラッカ海峡の貿易拠点として栄え、さまざまな文化が色濃く残るペナン島。見どころは、世界遺産の街「ジョージタウン」だ。イギリス植民地時代の名残りで、当時の栄華を感じさせるコロニアル調の建物に、マレー、中国、インド式の建物が混在し、異国情緒あふれる街並みが魅力だ。なかでも白亜の「シティ・ホール」はこの街のランドマーク的存在。アジアを代表するビーチリゾートとしても有名な島だ。



初寄港

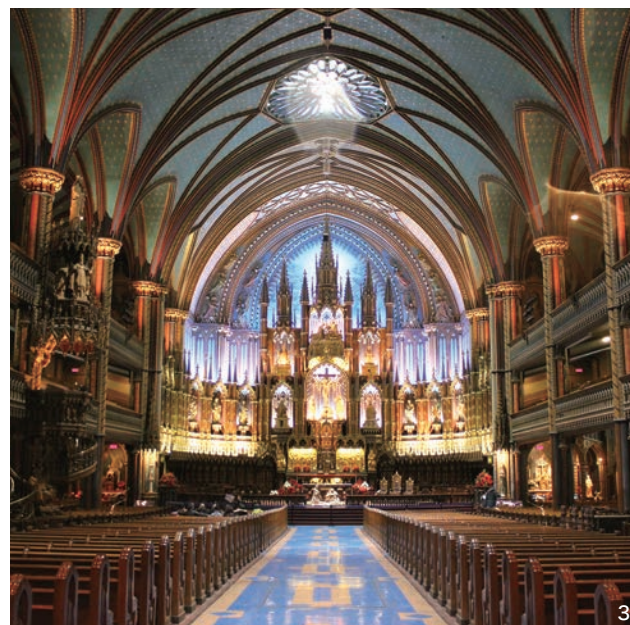
フランス東部地中海沿岸に位置する小国モナコ。面積は2㎢ほどで、世界で2番目に小さな国だ。街全体が華やかで、どこを切り取っても絵になるこの街は、「リヴィエラの真珠」と称されるほど。F1グランプリが開かれることでも有名で、世界有数の難コースから「世界3大レース」の1つにも数えられる。ほかにカジノを楽しめる「ル・カジノ・ド・モンテカルロ」など、小さな国が見どころは尽きない。



6年ぶり
寄港



エキゾチックな世界遺産の街「ペナン島」



3:「ノートルダム聖堂」は必見。教会全体が神秘的な雰囲気の中に包まれている。
4:鮮やかな紅葉と洗練された街のコントラストがこの街の魅力。5:カナダで最も規模の大きい美術館のひとつ「モントリオール美術館」。6:「モントリオール植物園」はテーマに富んでいて1日いても飽きることがない。

Montreal Food & Goods

ジューシーなスモークミートサンドはモントリオール名物。



フライドポテトにチーズがかかったプティンも有名。

かわいらしいお土産もたくさん。割れ物でも船なら安心だ。



1:モントリオールの最高地点、263mに建てられた「聖ジョセフ礼拝堂」。2:夜になるとライトアップが美しい「モントリオール市庁舎」。カナダで最初に建てられた市庁舎だ。

呑む美しさだ。内部のステンドグラスには街の歴史が描かれ、この街と長く歩んできた存在であることがわかる。さらに天井には約3万6000個にも及ぶ装飾された星々がきらめいていて、これらが醸し出す神秘さが、世界中の人々を魅了し続けている。

聖堂を訪れたなら、目の前のダルム広場中央にそびえる、モントリオールの祖メソヌーヴの像も必見。旧市街にはおしゃれなカフェやレストランも多く、目的なしでも街歩きを楽しめる。

カナダ第二の都市といわれるこの街の活気を感じるには、近代的な高層ビルが立ち並ぶダウンタウンへ。世界最大の地下街としても有名な「モントリオール地下街」では、メープルシロップといった定番のお土産をはじめ、ショッピングを楽しむには最適だ。

ダウンタウンの北側へ足を延ばせば、北米で最大規模を誇る「ジャンタロン市場」も。地元の人々に親しまれたマーケットで、日本では見ることができない食材を見るだけでもおもしろい。

近代的な建物と、古き良きヨーロッパの雰囲気が共存し、その表情の違いが楽しい寄港地だ。

優雅な雰囲気の魅力の「北米のパリ」モントリオール

セントローレンス川に浮かぶ大きな島にできた街、モントリオール。パリに次いで世界で2番目に大きなフランス語圏の都市だ。世界中から観光客が集まり、洗練された街の様子から「北米のパリ」と称されるほど。

モントリオール旧市街は、さまざまな歴史的建造物が建ち並び、モダンで優雅な雰囲気はまさにパリそのもの。その中でも特に有名なのが「ノートルダム聖堂」。黄金の祭壇がゴバルトブルーのライトに照らされ、教会全体を包む金と青のコントラストは息を



Montreal

ケベック州最大の都市。モントリオール国際ジャズフェスティバルや、世界的に有名な「シルク・ドゥ・ソレイユ」発祥の地としても知られる。

記念すべき 第100回クルーズ出航

ピースボートが初めて大海原へ漕ぎ出したのは、1983年のこと。2018年で35周年という節目の年に、第100回ピースボート「地球一周の船旅」を迎えることとなった。記念すべき今クルーズの行き先は南半球。「喜望峯」や「マゼラン海峡」を抜け、南太平洋の島々へ。大航海時代の冒険家と同じ航路をたどる、ロマンあふれる96日間の船旅が始まった。



横浜港でベイブリッジをくぐるシーンは、この船旅の代名詞。

「船に乗り、世界中の人々と出会うて気づいたこと、それは人種、肌の色、持っている価値観、いかなる理由でも私たちを分け隔てることはできないということ」です。35年前に第1回の船を出した、ピースボート共同代表・吉岡の想いがこもった言

葉で始まった記念すべき第100回クルーズ出航式。

12月26日の横浜港では、曇り空の隙間から眩しい太陽が姿を見せ、船側、岸壁側、双方のかけ合いで出航を祝福した。そして船長やクルーズディレクターの挨拶に続いて「せー



船長たちによる乾杯の挨拶。ゲストもたくさん駆けつけた。



色とりどりの紙テープが交わり出航を彩る。



歴代クルーズディレクターも乗船。

初日から船内はひとつに。この35年という長い歲月の間、ピースボートでは災害支援やICAN(核兵器廃絶国際キャンペーン)をはじめ、数え切れないほどの活動を実施。今クルーズでは、新たにフィリピン、NGO「Liter of Light(リッター・オブ・ライト)」と共同し「Voyage of Light(ボヤージュ・オブ・ライト)」プロジェクトを行う。電気が届かない地域に暮らす人たちに、ペットボトルの廃材やLEDライト、バッテリーといった比較的どこでも入手がしやすい材料と、太陽光エネルギーを使った持続可能な照明システムを届ける活動だ。今回はそのプロジェクトを推進する5名のメンバーが乗船し、世界一周の船旅でめぐる国々へ約



家族や友人など多くの人がお見送りに。

1000個のライトとその作り方などの知識を届ける。早速、出航式でも作りたての明かりを灯し、やさしい光でデッキが包まれた。今クルーズ最初の寄港地は中国の厦門。「もう待ち切れない」そんなたくさんの期待と夢を乗せて、気高い汽笛を響かせながら、ピースボートクルーズの記念すべき第100回目、船旅がはじまった。

の！」の一声で二斉に七色の紙テープが投げられ、船旅ならではともいえる幻想的な光景が広がった。見送りに来た人々も大きく手を振り、それに応えるように「いつてきます」といった希望に満ちあふれる声飛び交っていた。

翌日の27日には、神戸港へ入港。

ここは船と港のターミナルの距離が近いことが特徴で、見送る人と旅に出る人が握りしめた1本の紙テープが離れる瞬間が特に感動的。今回は記念すべき節目のクルーズということもあり過去の乗船者も多く、思いがけない再会を果たした人々も多かったようだ。

今までピースボートの船旅に参加したのは、のべ7万人。世界各国で訪れた港の数は200ヶ所以上。そんな今日まで続いてきたクルーズ



祝福メッセージはボードに。

を祝福し、過去に水先案内人として乗船した音楽評論家・作詞家の湯川れい子さんや、前ウ

ルグアイ大統領のホセ・ムヒカさんをはじめ、たくさんの方々からも祝福のメッセージが届いた。

ようやく今回の船旅の仲間が全員揃ったオーシャンドリム号では、ウェルカムパーティーが開催。華やかな衣装が船内を彩り、ウェルカムセレモニー、船長や歴代クルーズディレクターとの記念撮影など、各所でさまざまなイベントが行われた。セレモニーでは、船内生活を支えるスタッフやクルーがステージに登壇し、

おかげさまで50周年
50th Anniversary
JG JAPAN GRACE

ジャパン・グレイスも 設立50周年を迎える

JG JAPAN GRACE
株式会社ジャパン・グレイス



代表取締役社長 要 和弘

ジャパン・グレイスは、東京オリンピックから5年後の1969年、東京都港区青山にて国内旅行業務や各種催し物の企画運営を目的に設立されました。当時は旅行手配に加え、サントリートの新商品発表会やヤクルトスワローズの球団改名発表会など、さまざまな企画を担当してまいりました。その後、海外旅行の自由化が進むなか、1975年から海外旅行も取扱うこととなり、北マリアナ諸島のロタ島を中心に、ミクロネシア、オーストラリア、バリ島へのツアーを展開してまいります。同時期に、公立小中高教員の海外研修として、1ヶ月間のヨーロッパ訪問ツアーなども毎年行っておりました。

その後、1995年にNGOピースボートが企画するクルーズの主催旅行社となり、1998年に現在の新宿区高田馬場に本社を移転します。それから今日に至るまで、ピースボートと二人三脚で65回の

「地球一周の船旅」を含む80回以上に及ぶクルーズを企画・実施してまいりました。

旅が平和をつくり、平和が旅を可能にする――当社の社是にもあるように、誰しも自由に旅ができるというのは平和という前提があつてこそです。人と人が直接出会うことで互いの理解を深め、旅行を通してより良い社会の実現に尽力していく。そんな船旅を私たちはこれからも目指します。設立から半世紀が過ぎた今、50年の感謝の気持ち忘れずに、次の50年も「旅行業は平和産業である」という理念のもと、新たな出会いや感動を皆さまへお届けしてまいります。

船上百景 [正月]



青空の下、洋上で味わう鏡開きの一杯は格別だ。(写真は前クルーズ時)

洋上で迎えるお正月は 一生の思い出に

「3、2、1、よいしょ!」。パカンと木蓋が割れ、ふんわりと広がる日本酒の香り。洋上で迎える記念すべき第100回クルーズのお正月。鏡開きが行われたブロードウェイラウンジには多くの人が集まり、樽酒を片手に新年の訪れを祝福しあつた。フリースペースには、乗船者の協力で「和平船神社」が完成。華やかな着物姿の乗船者たちが記念写真を撮るなど、船内はお正月一色に。

鏡開きに来ていた60代の女性に話を聞くと「二度はクルーズ船に乗って年越しを過ごしてみたいと夫と話していて、ようやく夢が叶いました。いつものせわしない年末年始に比べ、今回は上げ膳据え膳で非常に楽ですね」と大満足の様子。乗客それぞれの想いを乗せて、船は南半球の大海原へ。洋上で迎える新年のひとときは、一生の思い出になるはずだ。



夕食にはおせち料理が振る舞われた。



手づくりの和平船神社で初詣。



現在航海中のクルーズは、日本が冬の時期に南半球をめぐる「南まわり」と呼ばれています。このルート、実は今からちょうど500年前の1519年にマゼラン艦隊が人類史上初となる世界一周を達成した航路です。それから時は流れ、スエズ運河が開通して間もない1872年。近代ツーリズムの祖と呼ばれるトーマス・クックが、世界初の世界一周団体旅行を敢行します。開国したばかりの日本にも寄港し、横浜、大阪、長崎で観光を楽しんだとか。そして乗客の募集に使ったのが、当時としては珍しい色彩豊かなポスターだったと聞くと、いま日本中の街中に貼られているピースボートのポスターとのご縁を感じます。ピースボートクルーズも1983年の船出からいろいろなことがありましたが、しかしそれら困難もすべて乗り越え、これまでに催行中止クルーズを一度も出さずに第100回目の記念クルーズを迎えられたことは、日頃から応援していただいている皆さまのおかげです。私たちはこれから先もより多くの方々と共に世界の海へ漕ぎだすべく、今年も二年励んでまいります。本年もどうぞよろしく願います。(N・I)